

## 終戦と私

富山県 松原敏子

### 一 終戦の日、前後

ここは北朝鮮の街、咸鏡南道咸興市。街外れのこんな所に検察所があったかな、と思いつながら厳しい感じの建物の中へ入って行った。途中のことは、よく憶えていないが、すぐに事務室のような所へ連れて行かれたことは、はっきり記憶にある。

私は二、三日前に、お願いをしていた日本人世話会から検察所への就職希望を聞かれたとき、何のためらいもなく飛びつくように承諾したことを、一瞬後悔した。新しい職場の仕事とは何か、どんな危険が待っているのか。急に不安になって身体が震えてきた。

しかし、とにかく就職しなければならぬと覚悟を決めていた。兄の就職はあてにならないし、お金とか貴金屬、その他食べ物に替えられるものは底をついていたし、十畳

の部屋に十四人もが押し込められている苦しい集団の生活を考えると、やっぱり後に引けない気持ちであった。

顔を上げると、日本人世話会の人気が楽そうに話をしている。部屋を見回すと、予想通り全部が朝鮮の人ばかり六、七人ほどで、それもみんな男の人であった。椅子に浅く腰を掛け身体を固くしている私に、世話会の人と四十歳前後の事務長さんらしい人が日本語で話し掛けてきた。「岡田さん(私の旧姓)ですな」「はい」「私はこの室の責任者のKです」と言って、私の顔と服装を改めて見て「私の言うことをよく聞いて実行して下さい」と、次のような意味のことを言われた。

「〇ここでは朝鮮語を使うようにすること。

〇事務一般、特に書類の清書が主な仕事だけれど、朝鮮の字で書くこと。

〇女の人はあなた一人だから、ストーブの火つけ、部屋の掃除、お茶汲み、使い走りの仕事もしてほし

い」

採用してほしい一心から、私は真剣に考えた。朝鮮語については、今は全然話せないけれど、あいさつぐらいは憶えら

れるだろうし、朝鮮の文字も全然分からないが、下書きを見て書くのだから何とかなるだろう。ガリ版切りは今までにやったことがあるから、まあまあ安心だ！」そうして私は採用された。しかし、娘が一人で周りはみんな朝鮮の男の人ばかりの中へ入り込むというのは、考えてみると随分大胆で無鉄砲なことだったに違いない。

案の定、検察所へ就職すると決まったことを知った部屋の人たちは、「娘を一人でそんな所に出すなんて……」と全員が反対した。それよりも、一番びつくりしたのは母である。母は「もしものことがあったら、北支のお父さんに申しわけがない！」と猛反対をした。「しかし、このまま何の手だても無しに過ごしては、一家全滅でしょう。日本に帰りたくても帰れない今、一か八かやってみるしかないじゃないの！」と言って、私は強引に勤めることにした。そのとき、兄は二度目の刑務所入りをしていた。だから母は、余計に心細く気がなかったことと思う。

八月十五日に終戦を迎えたときには、私の家では、父（岡田時夫）は新しい水利事業のために北支に行っていて留守で、母（あや）が主婦、そして家を守っていた。

父は、大正三（一九一四）年に師範学校を卒業し、富山県で小学校の教員をしていたが、新天地の開拓を志し、東京の学校に入り直して土木（土地改良）の勉強をした。

大正十二年に朝鮮総督府に赴任することになり、父母は祖父（政宣）と兄（菊郎）の家族四人で朝鮮に渡り、翌年の大正十三年に京城（ソウル）で私生まれ、次いで弟（洋哉）が生まれた。父は水利干拓の仕事で朝鮮各地を点々とした後、昭和十七（一九四二）年にはさらに北支に渡っていた。私たち家族も昭和九年には元山（緑町）へ、そして昭和十七年に咸興（馳馬町）にと転居した。兄は無線関係の仕事をしていて、元山での仕事（無線関係）に引き続き、咸興の逋信局に勤めていた。私は昭和十八年に京城女子師範学校を修了して、家の近くの咸興馳馬台国民学校の教員となった。弟は昭和二十年に咸興中学校に入学したが、勤労働員で連日貨車からの石炭下ろしなどをさせられていた。

戦時中の咸興は空襲こそ無かったものの、生活物資は不足し、特に食へ物には不自由していた。配給の大豆粕の塊を崩して米に混ぜたご飯などは、食べられたものではなか

った。

私たちは、兄の通信局の官舎に住んでいたが、官舎は咸興郊外の練兵場と道をはさんで向かい側に並んで建てていた。

終戦後間もなく、勢い込んで侵入して来たソ連軍は「何で、どうしてソ連兵なんかが入って来るのか？」と考えているいとまもあらばこそ、官舎のあちこちでソ連兵の略奪暴行が始まった。練兵場のテントから、二人、三人と連れ立って朝、昼、晩の区別無く日本人の家に侵入して来る。

玄関で「バン！バン！」と威嚇射撃をし、「ダワイ！ダワイ！」と言いながら泥靴のまま押し入っては、何でも略奪していく。腕時計が特に好きで、手首から腕の方までいくつもはめて喜んでいた。それにもまして恐ろしいことは、「女を出せ！」ということであった。泣きわめきながら連れ去られて行く若い娘。それを止めようとして、はじき飛ばされる母親。ひどいときは、銃で撃たれる人もいた。

兄は終戦の日に、雑音で分かりにくい陛下の放送を聞き、「しっかりやれ」ということに違いないと、元氣に出征して行った。入営した直後に敗戦が分かり、銃の菊の御紋章

削りなどして三、四日後に家に帰って来た。兄はすぐに、「家の中から赤いものと、娘に関係のあるものを隠せ。お前も絶対に姿を見せてはいけない」と私に言った。さすがは長男、テキパキと指図をしてくれた。ソ連兵が来ると、始めは地下室に隠れていたが、だんだんとエスカレーターしてくると、そこも危ないということになり、今度は天井に上がり柱の陰で息を凝らして、下の兵隊が去るのを待つようにした。母は四十半ばを過ぎていたので大丈夫と思っていたが、母さえも危なくなったので、思い切って街の中へ逃げることにした。母と私は男の姿になって、弟と共に夕方に風呂敷一つ持ち、線路伝いに咸興の市街に向かった。だれかに会わないかと緊張し続けて歩くので、四十分ほどの道のりが何時間にも思えた。幸いなことに、ソ連兵に会わずに咸興の街中に入った。古い付き合いのMさんの紹介で、Bさんの家に入れていただくことになった。私たちはこの家の二階、十畳の部屋に入り、咸興より北の雄基から命からがら避難して来た三家族と、併せて十四人がそれぞれの位置を決めて、集団生活をするようになった。母は洋服仕立て、弟はソ連人の家に新割りに行く。

そのころの咸興の街は、実に悲惨であった。朝鮮の北部や満州方面から避難して来た人たちと、私たちのように街の郊外から中央に集結して来た者が混じり、あの栄光の日本人の姿はどこへやら、汚く臭く、虱だらけで栄養失調の者ばかりであった。昼でも、道端の家の壁などにもたれかかった青黒い顔色の人が、幽霊のように両手首を胸の辺りに力無く垂れ、うつろな眼で一点をぼんやりと見ていたが、翌日にはもう冷たくなっていた。

兄たち日本人男子は、「長い間朝鮮を侵略し搾取した、けしからんやつ」ということで、刑務所入りを繰り返していた。出て来ると、亡くなった方たちの墓掘りに従事した。咸興の街を遠く包む小高い山は、塹壕のような墓が下から渦巻状に掘られ、もう中腹まで達していた。多い日は八十体ぐらいが埋葬されたそうである。初めのうちは、それでも全身菰で包まれていた遺体が、次第に頭とか足だけが辛うじて覆われ、縄で籠のように吊り下げられて運ばれていく。悲しい情景を眺めているのに、私たちは涙も流さず悲愴感も無く、ぼーっとして見送るだけで

あった。昭和二十年の十月ごろから、ソ連軍のゲペウという秘密警察が家族を連れて入って来た。私が検察所に就職を決めたときは、治安の方は前より少し良くなってきていたのである。

そのような情勢のころに、私の検察所への就職が決まったのだった。

## 二 避難行の始まりまで

翌朝、いよいよ出勤となった。六時過ぎに家を出たが、早朝六時の外出禁止令が解けたばかりの街中は、まだ人通りがまばらであった。北朝鮮の十一月末の朝は、頬も鼻も痛いような寒さである。三十分ほど歩いて「咸興南道検察所」と墨書した厚い木の看板が見えた。裏口に回って、大きく息を吸い込み、日本語で「お早うございます！」と大きな声を出して、ガラスの引き戸を開けた。まだ事務室にはだれもいなかった。「お早うございます！」って朝鮮語で何と云うのだろうと考えていたら、「リーン」と電話が鳴った。私は慌てて受話器をとって、思わず「もしもし、いや、もしもしじゃないかな？」とますます慌てた。朝鮮語はさっぱり分からないので、「もしもし」を繰り返していた

ら、じれったくなったのか日本語で話し掛けてきた。そのときちようど入って来たKさんに受話器を渡したが、何かもう、一度に疲れがドツと出た感じだった。

Kさんは、私が朝鮮語を話せるまで待っていたら全然仕事にならないと思ったのか、始めの約束は棚上げで、その後はいつも日本語で話し掛けるようになった。

Kさんは、検察所の中の資料室とか取調室とか応接室など、各部屋を案内して回った。歩きながら私の目の前に自分の両手を差し出し、「これを見てごらん！」と言われた。私は始め何のことだかよく分からなかったが、はっと気が付くと頭に血がドーッと上がって行くのを感じた。その両の手首には、赤黒いというか紫色のあざになった太い「すじ」がついていたのである。Kさんは「これはね、手錠の痕です。しかし、岡田さんは気にしなくてもいいですよ。私はこれを誇りに思っているのですから」と言われたが、私は顔が上げられなかった。

一回りしてから、お茶を出しながら各机を回り、「よろしくお願ひします」と日本語であいさつすると、どの人も「こちらこそ、よろしく」と日本語で答えてくれた。そ

れからは、ずーっと私とは日本語で話すことが自然な形となった。

ここでは刑務所に二回入ったとか、三回入ったとか、五回、六回と多く入った人ほど意志の固かった人と尊敬されているようであった。所長さんは白髪が目立つ六十歳ぐらに見える人だったが、十二年間も刑務所で過ごしたそうである。いずれも筋金入りの共産党員だったが、私たちが当時持っていた闘士というイメージとはほど遠い、物静かで優しい人ばかりのように思われた。

それからびびりしたことは、私の給料である。敗戦国で、しかも乞食同然の女の私だから、少なくて当たり前と思っていたのに、Kさんと同額ほどだと聞いて驚いた。間違いではないかと聞き直したら、「ここではみんな同志だから、きちんと働きさえすれば、皆同じ給料です。岡田さんも今は同志ですよ」と言われ、私は戸惑ってしまい返事に窮した。

所員が家からバケツ一杯もキムチを持って来てくれたり、朝鮮のお餅や野菜、肉などをときどき持たせてくれたときは、部屋の人や近所の人にも分けてあげた。あの時

期にこの厚意は、忘れられない有り難さであった。こんな所内の空気だったから、私も本当に張り切って、日本人の女として絶対に後ろ指をさされるような恥ずかしいことはすまいと、固く心に誓ったことだった。

十一月ごろから三月ごろまでの北朝鮮の冬は寒いのが、朝は必ず七時前には検察所に到着するよう心懸けた。各室の石炭ストーブに火をつけ、お湯を沸かし、全部屋の掃き、拭き、整頓など、私の生涯の中で、一番真面目に一生懸命にやったと思う。何かしら日本女性の代表になったような、また映画のヒロインになったような気持ちだった。朝早く各部屋の机の上を雑巾で拭くとき、決まって口をつけて出る歌は、なぜか「故郷の廃家」であった。

「いくとせ故郷、来てみれば

咲く花 鳴く鳥 そよぶ風

だが、本当は私は内地を知らなかった。父母や先生たちの話や雑誌、ラジオから想像した日本は、緑の木々が茂り清らかな川のせせらぎが聞こえ、すべてが美しく思われた。それが、跡形も無く破壊され廃墟となったこのうわさが流れていたので、この歌を口ずさみたくなったのである。

ろう。初めのうちは小声でそと歌っていたが、人気の無いのを良いことに、だんだんと大きな声になってしまった。次第に所内のみんなにも分かってしまったが、大きな声の日本語の歌も聞こえぬ振りをしていくれた。

掃除が終わるとお茶汲み、それが終わったら事務の仕事。事務は最初のころは調書用紙作りが主だった。戦前の活版刷りの用紙を見てガリ版で刷るのだが、私は飾り文字を書いたりするのが好きだったので、活字そっくりに書いたり、線を工夫したりして仕上げ、所員の人たちからは「活版刷りのようだ」と喜ばれた。刷り物が終わると、表紙をつけて綴り、それに背表紙をつけ仕上げるのだが、慣れてくるにつれて背表紙を波型に切ったりして、いろいろと工夫をした。好きな仕事でもあり、自分でも楽しんでいた。用紙刷り、表紙綴りが終わると、今度は調書の清書の仕事だった。現在は、朝鮮の文書を見ると、初めから終わりまで朝鮮文字（ハングル）だけで書いてあるが、その時分は漢字と漢字の間にハングルが使われてあった。ハングルはローマ字の組み立てと同じで、縦軸、横軸との組み合わせで一つの文字ができていると理解したらとても楽になり、

一覧表を見て案外すぐに書けるようになった。採用のときには、必ず朝鮮語を覚えるようにと言われたが、朝鮮語が分からないということがかえって好都合であったと思っただのか、全然そのことについて言及しなくなった。私に知られたくないことは、自分たちが朝鮮語を使えばよかったから。そのためか、秘密文書もたいてい私の方にも回っていたようだ。全部ハングルで書いてあるとチンブンカンブンだが、漢字混じりの文は漢字をつなればある程度理解できる。私は、最後まで全然分からぬふりをしていた。

清書の仕事になってからは、目が痛くなるような忙しさであった。帰宅するのは、いつも戒厳令下の午後八時過ぎで、九時になると不気味なサイレンと共に外出禁止が始まる。あのとき、毎日どのようにして帰ったのか、今考えるところとする思いだ。所員全員が朝鮮人男性で、その中に敗戦国日本の若い娘が一人。すぐにある種の危険が考えられるが、夜遅くまで残業していても、全然その気配を感じたことが無かった。私も日本の女として、決して恥じないようにしようと固く心に誓って行動したつもりだが、あの人たちも、あの時期にソ連軍の兵隊などとは比べ

られないくらい立派な態度であった。

年明けの昭和二十一年の二月ごろのある日、私はいつものように各部屋の掃除をしていた。急に表通りが騒がしくなってきた、大勢の人の声や足音が聞こえてきた。いつの間に入って来ていたのか、窓際のカーテンを片手で持ちながら「岡田さん、ここにいらっしやい」とKさんが呼んでいた。

ここにはKさんという名の人が三、四人もいた。このKさんは、戦前に早稲田の法科を出たというインテリで、ハンサムな人だった。近寄って外を見ると、肩に鍬や鋤を担いだ人たちの行列であった。口々に何かを叫び、ときどき「マンセイ！ マンセイ！」という言葉と同時に、握りしめたこぶしを空に突き上げた。「デモです。みんな喜んでいるのですよ」「人々は農地を解放され、自分の土地を持つことができますようになりました。私はこの日がくることを前から待っていたのです！」と言うKさんの大きな目に光る涙を見たとき、私は複雑な思いで胸がいっぱいになった。あのときのKさんの感激に満ちた表情を、私は忘れることができない。

三月の声を聞くと、冬の間は我慢に我慢を重ねていた

「内地へ帰りたい！」という熱望が、もう爆発寸前になっていた。街のあちらこちらで集まっては、話し合いがあった。

「夕べ、玄関の靴や下駄が、東を向いて並んでいた夢を見たから、もうすぐ内地へ帰れるかもしれない」などと、大の男が真面目な顔をして話しているのを見た。「早く日本へ帰りたい」「帰りたい」どの人も思いが高まっていて、どの顔も殺気立ってきた。兄も、刑務所への出入りの繰り返しや墓掘り、遺体の運搬などの明け暮れで定職も無く、内地へ帰ることはかり考えるようになっていた。兄は弟に、「ソ連人の家での薪割りのお駄賃は、固い黒パンか缶詰のような日持ちのするものをもらうように」と言い聞かせていた。母は残り少なくなった持ち物の整理や、着物の襟、靴下などにお札を縫い込んだりしていた。兄は官舎に隠しておいた物を取って来るなど、出発の準備を始めていた。そして、「私に「検察所からの旅行証明書を、どんなことがあってももらってくるように」と厳命した。そのころの北朝鮮で、絶大なる権力のある検察所の証明書があれば、きっと汽車に乗せてくれるに違いないとの考えからであった。私は初めのうち、正直なところ検察所の空気に慣れたのか、

兄や母ほど切羽詰まった気持ちにはなれなかった。

所内では「こんなに岡田さんのことをかわいがっているのに、どうして日本へ帰りたいの？」とか「良い人を見つけてあげるから、結婚してここに残りなさいよ」とか「日本は特殊爆弾で焼け野原になっていて、とても暮らせる所ではないよ」と、いろいろと引き止める話をしていた。朝は母や兄を始め、部屋の人たちの「今日こそ頑張ってもらっておいで！」という声援を背に出て行き、頼むのだが、なかなか証明書は書いてくれなかった。

そのうちに、この家を紹介してくれたMさんの奥さんが発疹チフスで亡くなり、同室のNさんのおじいさんも発疹チフスにかかったことが、私の心を決定的にした。「よし！ いろんなことがあっても証明書をもらわないと大変なことになる」と覚悟を決めた。

忘れもしない四月の十日、その日もまた、所長さんを始めみんなに、「証明書を書いて下さい！」とお願いした。みんなは顔を見合わせて黙っていた。私は、もう絶望的な気持ちになって思わず泣き出した。しーんとした室内に、私の泣き声だけが響いていた。「証明書は書いてあげます



よ」私は一瞬耳を疑ったが、「書いてあげますよ」という事務長さんの声が再び聞こえた。とたんに、さらに大きな声で泣いてしまった。事務長さんのこの言葉の裏には、タイミング良く四月から朝鮮人の女の事務員が採用されたこともあったと思う。旅行願いの様式を見せてもらって書くこととしたが、手が震え、頭が混乱して字を間違えてばかりいて、なかなか書きあがらなかった。同じ部屋の人たち、それにMさん親子の名も書かないと焦って、義兄、義弟、姪、甥と書いていたら、十二人の家族になってしまった。

次の日、所長さんは「所員が家族と同伴で三十八度線の近くの江原道全谷という町に転居することを証する」という意味の文書に、咸興南道検察所のゴム印と赤い大きな職印をポンとおしてくれた。遂に証明書が発行されたのである。

家に帰るとき、「足が地に着かない」というのを実感として初めて体験した。足がひとりでに飛び上がるような、腰の辺りが崩れそうな感じだった。あの喜びと感激は、二度と味わうことはないだろう。

四月十二日、別れの日。最後まで残してあった家宝の、

美人が描かれている浮世絵の盃を所長さんに贈った。「岡田さん、いつか国交が回復したらまた会おうね!」と言った。一人一人と別れの握手をした。あの人たちの顔はもう薄れてしまったが、あの手の温もりは、今も鮮やかに残っている。国の体制、政策、主義主張は違っても、一人の人間としての情は変わらないのだということを、しみじみと感じたのである。

### 三 逃避行の苦難

遂に証明書を手に入れることができた。部屋の人たちは、自分の名前が書かれている証明書を見て、涙を流して喜んでくれた。私は、みんなの名前を書くことを忘れても本当に良かったと改めて思った。今までここから脱出しても見付かって連れ戻されたり、運悪く射殺されたりした人たちのことなど、脱出がいかに難しく危険かということは十二分に知っているはずだったが、そんな危惧は吹っ飛んでしまい、ただただ嬉しかった。

出発日はあと二日後、みんなは「ハッ!」と我にかえって、部屋でそこそこで荷物の点検整理が始まり、にわかには部屋中が慌ただしく活気に満ちてきた。紙幣を着物の襟や

裾、縫い代の裏などに縫い込んだり、二重靴下の底や靴の敷き皮の下などに、あれこれと工夫をして見付からないように念じながら隠した。リュックサックに入れる荷物の

選択には、みんな頭を痛めていた。衣類、下着類のほか、思い出の品はできるだけ持って行きたい。幼いときや学校時代の写真も。祖父が金沢藩士だったので、先祖伝来の刀大小二振。槍。弓、鹿の角の刀掛け、また父の自慢の佐久間象山の掛軸、兄が危険を冒して官舎から少しずつ運んで来た古文書類があったが、リュックサックに入らない物はもちろん、もし荷物検査を受けたとき、危険人物と疑われるような品物は断腸の思いで除いた。リュックサックが満杯になったら、何を取り出すか。ゆとりができたら何を入れるか、入れたら出したり、頭の中はパニック状態となったが、そんな中でもあの証明書があるということは、非常に心強いことだった。何かの場合、水戸黄門の印籠のように、威力を放つてくれるに違いないと。いよいよ敵地を突破するという悲壮感と共に、ちよびり安心感もあった。私の服装については、髪の毛を坊主頭に切ろうかどうしようか随分迷ったが、「髪の毛は切らない方が良い。内地に帰って

もなかなか伸びないからね。年ごろの娘として、かわいいぞうだ。行動中は絶対に守ってあげるから」と力強く言ってくれる優しい兄の言葉で決心した。

慌ただしい二日間も過ぎて、昭和二十一年四月十三日。いよいよ出発の日がきた。白い霧の中、人影がぼんやり見え隠れする早朝。古く薄汚れた大きなリュックサックを背負い、両手に思い思いに大きな手提げ袋や風呂敷包みを持つ、ちぐはぐな服装の十二人（内幼児一人）が、込み上げてくるいろいろな感慨を抑え、無言で出発した。

咸興駅に着いた。駅に来る避難民の、おどおどとして哀願的な態度になれている駅員は、堂々と、いやにふてぶてしく見えたかもしれない私たち一行を、いぶかしげに眺めていた。

私たちは、早速に例の切り札の証明書を見せた。証明書を手にとって見た駅員は、案の定驚いた顔をして事務室の中へ入って行った。私たちは顔を見合わせた。しばらくすると駅員が戻って来て、切符を買って改札口を通るように言った。「ヤッター！」第一関門突破。「これで日本へ帰れる。本当に帰れるときがきたのだ」と思うと、胸が高鳴ってき

た。「落ち着け！ 落ち着け！」と気持ちをやだめながら改札口を通った。みんなも同じ思いで、後ろを振り向かなかった。それからのことは、全然覚えていない。

ふと夢から覚めたように気がついて、辺りを見回してびっくりした。「えっ！ これなあに？」鉄の箱の車、すなわち貨車だった。こんなはずではなかったのと思った。床には、ちくちくこわこわの葉が一面厚く敷いてある。そして、新入りの私たちを眺めるドス黒い顔。その目が不気味に見えた。汽笛と共に黒く重い戸が閉まり、すべてが闇の中に沈んだ。汽車は動きだした。しばらくすると目が闇に慣れて、周りがぼんやりと見えてきた。その間に、私たちは空いている場所を足で探りながら、探して座った。満杯に近い人たちが、車の振動と共に揺れ動いている。以前に見た日本映画の「牢屋に新入りが入って来てすくんでいる」ような雰囲気であった。いじけている私たちに「ろう名主」のような人が、車中での心得を話し始めた。

○「昼間は絶対に戸を開けないこと」

○「便は隅にある壺の中にする」こと」

○「大声を出さない。子どもは絶対に泣かせてはいけ

ない」

その人は必死で話していたのだが、私はあの証明書は何だったのか、改札口を通るだけのものだったのか、この汽車の中は何なのだと口惜しく腹立たしかった。乗れたただでも方に一つの大変な幸運であることも忘れていた。

そのうち諦めて、今はただ速く走れとだけ念じるようにしたが、貨車は相変わらずゴトゴト走っていた。もっと速く走れ、もっと早く走れ、とひたすら思う。全然食欲は無い。何だかよく分からないけれど、夜になったようににも思われ、翌朝はきつともう三十八度線近くの駅に着くに違いないと、勝手にそう決めていた。暑さと人いきれで、本当に息苦しい。列車は「ゴトン！ ゴトン！ シュッ！ シュッ！」と熱い空気をかき回すように揺れた。

早く朝になれと念じながら、寝たのか起きていたのか分からないうちに、何だかざわざわとして朝になったような気が配がした。出入口近くのだれかが、そっと戸を少し開けた。さーっと涼しい風と共に朝が見え、皆の顔にも喜びの笑みが走った。「万歳！」とみんなは叫んだ。だが、そのとき「おかしいぞ！」とだれかが呟いた。「昨夜の駅付近から、ちっ

とも進んでいない」「そんなバカな!」「一晩中、あんなにガタンゴトン音がして走っていたではないか?」「でもおかしい」と口々に話し合っていた。その疑問に、戸を大きく開けて白い霧越しに外を見ていた人たちが、「やっぱり目的地ではない」と叫んだ。みんなは狐に化かされたように、呆然としている。「じゃ、夕べから汽車はどこを走っていたのだろうか?」「同じ所を行ったり来たりしていたのではないか?」「みんなは驚きと腹立たしさに頭を抱え込んだ。

どれくらい経ったか分からないが「このままだと、せっかくここまで来たのに、ソ連兵に見付かるか、元の所へ帰されるかのどちらかだ」「早くどうにかしなくてはいけない」車内の心が初めて一つになったような気がした。先に乗っていた人たちは、私たちよりもっと北の各地や満州方面から、やっこの思いでこの汽車に乗ったのだ。「もう絶対に戻れない」「どうしたら再び汽車を走らせることができるのか」「どうして後戻りしたのか」「あれこれ考えて話し合っているうちに、だれかが「みんな、隠して持っているお金を幾らかずつ出して機関手に頼んでみてはどうか」「ああ、そうだ」とやっど気がついた。弱みにつけ込まれた悔しい対応

だったが、この際そんなことは言っておられない。早速集まったお金を渡すために、代表者が出掛けた。どうか汽車を再び走らせて下さいと、みんなは神様、仏様に祈るばかりだった。どれくらい経ったか、随分長く感じたが、代表者はやっど帰って来た。結果は、「OK」「やっぱりお金が足りなかったのだ」と話した。こうして汽車はまた走り出した。今日は何日かもよく分からなくなっていたが、とにかく汽車は間違いなく走っている。車中は相変わらず暑い。そしてまた夜になり、朝になったようだ。

やっこのことで、元山に着いた。そのときにはまだ残っていた日本人世話会の人たちから、温かいお茶やお握りを頂いたような気がするのだが、懐かしさのあまりに浮かんだ幻覚なのか、あまりよく覚えていない。

再び、貨車に乗った。状況も同じで暑く汚く、でも汽車は音を立てて間違いなく動いている。だから、内地への道も確実に近くなっているという喜びで、車中の雰囲気は割合明るくなっていた。途中で止まったり戻ったりしないように、先にお金を渡して万全を期した。後は、できるだけ三十八度線に近い駅に着くのを願うのみで、人々の祈

りと希望を乗せて汽車はひた走った。

「ゴトン」と大きな音を立てて汽車が止まった。まだ寝ている人が大部分だったが、「ガラガラ！ズドン！」と入り口の重い戸が大きく開いた。わけの分からないとなり声がある。一体何が起ったのか。「起きろ、外へ出るのだ」「降りないと危ないぞー」という人々の声に、さうと緊張と恐怖が身と心を駆け抜けた。ソ連兵に見付かったのだ。リュックサックを担ぎ荷物を持つと、貨車から飛び降りた。ソ連兵が、また何かどなっている。今まで耐えてきた苦しみも水の泡か？もうここでおしまいかと、力の無い足取りで歩き始めた。外はまだ薄暗く、白い霧がかかっていた。

降ろされたのは、鉄原という所らしかった。駅前の広場ではもう朝市が始まっでいて、たくさんのお客と買物客でこた返っていた。気がつくくと、幾つもの貨車から降ろされた避難民が、長い列を作っている。馬に乗ったソ連兵が銃を持って所々にいて、何か大声で叫んでいる。「並んでこちの方へ来い」ということらしい。朝市の物売りも客も慣れているのか、よけようともせずお互い大声でしゃべって、いかに活気に満ちている。一方、哀れな私たちはソ連兵

に連れられて、その間を縫うように歩かされ、どこかに集められようとしている。同行の十二人も、縦に並んでとぼとぼと歩いてきた。そのとき、突然兄が近づいて来たかと思つと、口早に「向こうの山まで、人混みにまぎれて一人ずつ逃げよう。あの山で、みんな必ず会おう」と言ったかと思つと、サツとまた列に入った。周りを取り囲んでいたのがソ連兵だったことが、後で考えると幸いだったのである。彼らには日本語が分からない。朝鮮人と日本人との顔や服装の区別がつかない。それに、朝市の人たちは密告もせず私たちを無視してしてくれたことも、幸いであった。兄の言う向こうの山は、駅の後の方に小高く連なつて横たわっていた。それが東なのか西なのか、京城の方向なのか分からなかったが、一同は必死で敢行することにした。と決心はしたものの、列から離れようとするのが怖い方が先に立ち、足がすくんだ。少し列の横に出ては、見なくてもいいのにソ連兵の様子を伺う。何だかこっちを見てにらんでいるように見えて、また列に戻る。

そんなことを二度、三度繰り返しているうちに、だんだん霧が晴れて明るくなってきた。どうしよう。今、敢行

しなければ間に合わなくなる。心配で心臓はどきどきし、頭にかーっと血がのぼってきた。突然、私一人だけが置いてけぼりになったような、恐怖感が突き抜けた。すぐに出なければと思い、とっさに少しだけ横に出た。買物客のよくなふりをして、売店の方へ行って座った。それから次々と座りながら移動して、遂に列から離れた。しめた。今度は反対方向へ走り、またさっと次の店へ行く。それから、立ち上がってどこも見ないで、じくじく小走りに移動した。ソ連兵には気付かれなかった。逃げ急げと自分に言い聞かせながら、一心に山へ向かって歩いた。兄は？ 母は？ 弟は？ 探す余裕などなかった。途中のことは全然記憶に無い。でも着いてみると、一人も欠けず十二人が集合していた。

「あの山へ集合」と言うだけで、十二人全員が無事に集結できたなんて奇跡だった。好運を感謝する。「こんな不思議なきことであるんだ」と、一同手を握り喜び合った。次の瞬間どっと出た疲れで、林の茂みの中にみんなで固まって死んだように眠りこけてしまった。

どれくらい時間が経ったか分からないが、何となくザワ

ついで、みんな眠りから覚めた。まだ周囲は明るい。さて、どうしよう。初めてお腹が空いていることを感じた。そう、まず腹ごしらえだと、また乾パンや缶詰で食事をした。しばしのゆとりであった。そして夜を待った。

夜になり、いざ出発。ソ連兵に見付かったそのときは即、射殺。音は絶対に立てられない。みんなは思わず六歳の子供の方を見た。その子は気配が分かったのか、口を「へ」の字に結んで、上目遣いに大人の方を見据えた。みんなは気を取り直した。さて、どっちの方向に行っていかが分からなかったが、一行の中に朝鮮語が話せ、地理にも詳しいMさんがいた。それからは、Mさんの背から離れないように付いて行くことにした。暗闇を歩いているうちに、どうも一人多いように思った。よく見ると、脱走兵のような人が一緒に黙って付いて来る。名前も言わず、またこっちからも聞かない。だれも拒む理由は無かった。一行は十三人となった。暗い山道を、息をひそめ音がしないように歩いた。ここはどこで、どこの山なのか。とにかく三十八度線を越えるために歩いているのだ、ということ以外一切分からず、ひたすら人にはぐれないようにと、一生懸命に付いて行

くだけだった。枝の茂った樹木のトンネル。獣道のような枯葉の敷き詰まった狭い道。音がするたびに立ち止まり、またひたすら歩く。まだ寒いはずの季節だったが、背中は汗でびしょりだった。

空が次第に明るくなって再び朝がきた。ふと、さらさらとかすかな音を立てながら流れていく水の輝きを見た。小さな川の流れを見付けたとき、心が和んだ。なだらかな斜面を探して、一同小休止。束の間の安らぎ。朝食は久しぶりにこの水で米を研いで、飯盒炊飯でと思った。みんなも考えることは一つだった。だが、煙が上がっては、だれかに見られてしまう。残念ながら、それは中止にした。みんなは顔と手足を洗うにとどめた。今朝もまたパンと缶詰。それでも腹がふくれると、眠気がドツと押し寄せてきて、みんなはいつの間にか寝込んでしまっていた。

目が覚めて、今日は何日なのだろうと考えた。多分、十七日ごろではなかったか。ここまで、母も兄も弟も私も他のだれも病気にもならなかったのは、幸運だった。特に幼い女の子は大きな声も泣き声も立てず、ひたすら大人に離れず小走りで付いて歩く健気さに、一同勇気づけられ

た。

小休止が終わって、再び歩いた。山の上まで登って行く、平坦地が開けていて小さな村があった。終戦以来、何人も避難民が通って行ったらしく、難民ずれして、村民の方から四、五人寄って来た。Mさんは、「この辺りに三十八度線の川があって、舟で渡れるそうですが、そこへ行くにはどの道を行けばいいのですか？」と尋ねた。例の証明書も見せたら、驚いた様子だった。相手は、額を寄せ合って朝鮮語で何やら話をしていった。こちらには通じないと思っているようだが、Mさんには内容が大部分かった。彼らはお金の額によって、便利な道か不便な遠い道かを教えようとしていた。一刻も早く三十八度線を越えたい一心だから、金額を多少多めに出すことを即決して渡した。だが、金額は多めに取っても、本当にそこへ行く道を教えてくれたのだろうか。すっかり疑い深くなっている私たちは、次から次へと心配が湧いてきた。ああ、あの三十八度線への道、きっと警戒も厳しいに違いない。鉄条網は無い。ソ連兵が急に現れて、銃で撃ちはしないだろうか。また、引つ掛かるとカランカランと鳴る縄など張っていないだろうか



か。昼間歩くことの不安もある。いろいろな不安、不安というより恐怖心でいっぱいだったが、ぐずぐずしてはられない。とにかく一か八かで歩きだした。途中、ほかの人たちには会わなかったのも不気味であった。土と小石で滑りそうな細い道を、上がり下がりしながら無言で歩いた。

なかなか目指す川べりの家に合わないうちに、また小さな村に入った。Mさんが早速村人に尋ねると、少しづれではいるが道は大筋で合っているとのことだった。嬉しくなつて礼金をはずんで、また出発した。もう少し、もう少しと思ひながら歩いた。日はもう大分沈んできた。冷たい風がさーと吹いてきた。そのうちに、さほど川幅は広くないが、雨上がりのような土色の水がゆっくりと流れているのが見えた。「あ、あの川だ。あの川が三十八度線の川に違いない」今まで渡ろうとした避難民たちの嘆きと、喜びの声のような音を立てて目の前を流れている。何の変哲も無いような川だが、遂に来たのだ。みんなは、埃と汗にまみれた顔を見合せて笑ったが、次の瞬間には顔が涙ぐみしやぐしやになつていった。

川岸から少し離れている所に、二、三軒の家が見えた。

三十八度線を越えるときには、その家で一晚泊まり、翌早朝に舟で渡るのだそうだった。その中の一軒に、Mさんが宿泊と舟の手配を頼んだ。その主人は一見親切そうに見える、こんなことに慣れていて「万事任せなさい」の雰囲気ですべての交渉がまとまった。私たちは先を争うように家へ上がらせてもらった。部屋数も少なく狭い家だが、久しぶりに屋根の下で最後の夜を過ごすことができるのだ。大人たちの、はしやぎようは何だろう。大声でしゃべったり、ぶざけ合ったりしている。それから休む間もなく、荷物の整理を始めた。重くても、これだけはどうしても内地まで持つて帰るのだと、ここまで大事に持つて来た品物。その一つ一つを取り出し感慨深げに眺めたり、なでたりしている。そして整理が一段落すると、宿と舟のお礼について話し合った。もう本当に残り少なくなつたお金だが、ここが最後の正念場ということで、奮発して多すぎるくらい主人に渡し、くれぐれもよろしくと頼んだ。威興を出発して幾日目になるだろうか。忘れかけていた家の中の夕食を、久しぶりにくつろいだ気持ちで頂いた。終戦前後から今日までの長い間、口にしていなかったご飯やキムチなどのご馳



走が、ここにはあった。ひとしきり今までの逃避行の話に花を咲かせていたが、明朝こそは何度も夢に見た悲願の三十八度線を越えるのだと思うと、感慨無量だった。薄暗い間に川を渡るというので、すぐに持つて出られるように、外の廊下に整理した荷物を並べ、眠りにつくことにした。明朝は早いだからと眠ろうとするが、興奮でなかなか寝付かれない。そのうち寝返りをうつ音がだんだん少なくなつて、全員が寝入ってしまった。

朝がきた。いつの間にか全員目覚めている。いよいよだ。数々のドラマを生んだ脱出劇の幕が今、下りようとしていく。「万歳」あの川を渡ったら今までのつらさが吹っ飛ぶのだと考えるだけで、興奮の渦だった。朝飯なんかいらぬ。とにかく早く舟に乗りたい。廊下に並べておいたりユックサククの所に、一斉ににじり寄つた途端、「しまった!」「やられた」だが、声は無い。ぐっと目を閉じ口をキッと結んだ怒りの表情が、そこそこにあった。安心しすぎたのだ。まだまだ脱出劇は終わっていない。タベ母が確かに入れた宝石の箱が無い。だれかの「革靴が無い」という声も聞いた。だれも何かの被害を受けたらしい。だが、だれも大声を

発しなかった。悔しいけれど、本当に悔しいけれど、声を出した途端に、三十八度線が遠くに飛んで行ってしまふという恐怖感からだった。心と顔と裏腹な何食わぬ顔に戻つて、何食わぬ顔の宿の人に「早く舟を出して下さい」と言うが早いか、土手を滑り下り、川の岸につないであつた舟に一斉に乗り込んだ。「早く向こう岸に着きたい」今はもう、その思いだけだった。川の流れはあまり早くなく、櫓を漕ぐ鈍い音が、流れの音に勝っていた。途中で舟が戻るのはないか。だれもが、同じ心配の顔をしていた。緊張の空気の中、舟はだんだん向こう岸に近づく。もう少し、もう少し、小さな衝撃と共に遂に岸に着いた。早速、先を争つて岸に飛び降りた。思わず沸き起つた「万歳」「万歳」の叫び。抑えに抑えていた数々の思いの爆発だ。胸につかえていたものが飛び散つた。一気に土手に駆け上がるようにした私たちを、だれかが制した。「この後、私たちのような日本人が来るに違いない。あのことはあれとして、川を渡してくれた礼はきちんとしよう」「この一言でみんなはあつさり」と納得し、「ありがとう」「さようなら」と礼を述べた。これで完全に北朝鮮と決別したのである。枯れた雑草を

分けながら川の土手を登ると、そこは今までの山道とはうそみたいに、木や草の無い朝鮮特有の赤土の広野が広がっていた。皆はしばらく南鮮の山に見とれていた。

さあ、京城に向かって出発だ。もうびくびくしなくなってもよい。胸を張って堂々と歩こう。長い間、苦楽を共にして三十八度線を突破した十三人の同志たちよ。私たちは、砂埃を立てながら力強く歩き始めた。ふと気が付くと、六歳の女の子が笑っている。歌も唄っている。泣きたかったこともあったろうに、我慢して必死に付いて歩いた女の子。私たちは、改めてその健気さと強さに感激したのである。

そのうちに、だんだん歩く仲間が増えてきた。別のルートで三十八度線を突破して来たのであろう。汚れたどの顔も、一様に晴れやかであった。そして、苦しく長かった北朝鮮での逃避行が完全に終わったのである。

京城に着くと、駅前で方面別に分けられて宿舎に向かった。途中、朝鮮の人の怒号、罵声。石も投げられた。一日か二日いて、汽車、今度は客車だった。釜山へ向かった。釜山で乗船証明をもらって船に乗せられ、山口県仙崎港

に上陸した。その間、何回となく頭、体に白いDDTをかけられた。

本籍の富山県大滝の叔父の家に着いたら、まさかの父が、先に北支から元気で帰って来ていることが分かった。いくつ目の奇跡だろう。

#### 四 引揚げ後の生活再建

父は終戦時、北支で築城部作業隊に入隊の途上終戦となり、二十年の十二月、米軍の上陸用舟艇で佐世保に上陸。大滝の家で休養後、石川県小松市に居を構えたが、定職にはなかなか就けなかった。狭い家の間借り生活で、安定収入もない苦しいスタートであったが、一家は父のもので久しぶりに五人揃っての生活に戻った。戦後のことで、食糧その他生活すべてに苦しく厳しかった。

私は引き揚げた年に、一時家電関係の工場に就職したが、間もなく地元の小学校に教員として復職を果たした。これは、咸興で勤務していた小学校の校長先生が、在職の教職員全員に下さった勤務証明書のお陰である。兄も、元山、咸興と通信局に勤めていた関係で、郵便局の保険の仕事に就くことができた。弟は、地元の小学校の高等

科二年に編入した。母は、縫い物・編み物の内職で苦しい家計を支えた。時期的には多少前後したものの、父を始めそれぞれ就職し、また一同健康に恵まれたので、ようやく安定した生活に戻ることができたのである。

翌二十二年、私は富山県高岡市の松原寛と、また兄は石川県加賀市の善田操と結婚した。

それから半世紀余り過ぎたが、いまだに世界のあちこちで騒乱が続いている。自分たちの幸せを思うとき、一日も早い平和を祈ってやまない。

